

弥生講堂16年

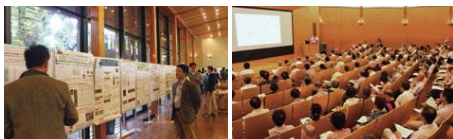


東京大学弥生講堂は2000年3月に開館しました。早いもので16年の歳月が流れています。補助椅子を使えば300名程度のセミナーを開催することが可能な一条ホールを中心に木造建築として計画・建設されました。その広さについては農学部への進学生が一同に着席できるホールとすることを念頭に置き、岩手県遠野産のカラマツ集成材により空間が構成されました。建設当時、農学部125周年記念事業の寄付建物として位置付けられ、浜松に本社がある住宅会社の一条工務店による寄付と施工によって完成しました。完成後今日まで予約が最も取りにくい大学施設として多くの方々に利用されています。利用率が高いことから定期的な点検や日常のメンテナンスによって最良の状態を維持できており、当初より木の色も落ち着いて良くなっていると言えそうです。

エピソードも数々生まれています。ホール建設当初は椅子の座面に現在は置かれているクッションがなく、

合板の座は滑りやすい状態でした。あのホールでは寝にくいとクレームを受けたこともあり、苦笑いしたことも懐かしい思い出です。ロビー部分には柱が林立しており、話に夢中になり頭をぶつける方もいるようです。熱心な議論が行われることは好ましいのですが、木材とは言えぶつかれば痛いのでご注意ください。

なぜ木造なのか…わが国で戦後造林した木材資源が成長して利用可能になり、2010年には「公共建築物等木材利用促進法」が制定されました。今や積極的な木材利用の時代に入っていますが、先駆的な木造建築物の好例として評価を得ており、現在も見学者が多いのも弥生講堂の特徴です。その後、弥生講堂アネックス（2008年）、東京大学ファカルティハウス（2009年）と弥生キャンパスにはそれぞれ異なる目的のために木造建築が建てられ、大学での様々な活動、とりわけ農学系の研究活動の拠点としてその役割を果たしています。



安藤 直人 東京大学名誉教授

(寄付講座木質構造学研究室 特任教授 (28年3月終了))